

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

龍神伝説への想い----- 西崎 正夫 私の好きな風景----- 志津 憲司
こんにやくと私----- 津田 博徳 銀座のキューピット----- 高塚 国義

心に残った言葉・話

島田 敏晃

私は、本を読むことが好きですが、本を読んでいる時「あれ、これいいな」と、心に残る言葉・話を見つけることがあります。その時は、忘れないうちにメモしておきます。そのメモの中から、いくつかを披露したいと思います。まず自殺しようとしている若者というか小・中学生に送りたい。

○ ナイジェリア国の格言で「生きていく限り望みがある」
・車のラジオで聞いた、政治家ジャーナリストの座右の銘「死ぬこと以外はかすり傷」
みんなもつと強くなつてほしいと思います。
「(幸福)とは、こんな当たり前の暮らしが出来るところにあると思う。」
○ 住み慣れた家と町で
○ 見知った人たちと
○ 慣れたお店で買い物をして

○ 複数の人たちと食事をして
○ 同窓会に参加し
○ 相談できる人たちがいる」
『カルメン』を書いたメリメの言葉に「猫と女は呼ぶと逃げる。そして、呼ばないときやってくる」
こんな言葉もあります「10年頑張れば神様がご褒美をくれる」「行く言葉が美しくこそ、来る言葉も美しい」「子供泣かすな来た道じゃ。年寄り笑うな行く道じゃ」「悠々自適は5年でボケる。あくせく自適は医者いらず」
一時期ブームになりました『日本一短い「母」への手紙』より
・お母さん、雪の降る夜に私を生んで下さってありがとう。もうすぐ雪ですね。
・母さんありがとう。母さんが私を信じてくれたからこ

そ、私も娘を信じぬけます。
(39歳 女性)
・おふくろ、死ぬなよ。いいというまで死ぬなよ。親孝行が全部終わるまで死ぬなよ。
(28歳 男性)
昨年NHKの大河ドラマで話題を呼んだ、戦国時代の軍師、黒田官兵衛が残したとされる言葉に「草履片々、木履片々」があります。人は時には片方の足に草履、もう片方に木履(ゲタ)という、走りにくい状態でも走り出さなければいけない。目的を果たすには、時期を逃さずに行動することが大切だと説いた言葉です。
中学生の時に出会った、心に残った最初の言葉は世阿弥の「初心忘るべからず」です。私の人生も、終盤にかかっています。残り少ない人生を、悔いの無いように生きたいものです。そこで最後に、某スパーのキャッチコピーを一字変えて「人生も終盤戦が面白い」。
(編集委員)

龍神伝説への想い

印旛沼地域には龍神伝説がある。私がこの龍神伝説に興味をひかれて久しい。

先日久しぶりに龍角寺と龍腹寺を尋ねた。房総の村へ寄ると、そこで『龍のきた道』五十嵐行男著という本が500円で売られていた。

4冊購入し、パラパラとページをめくってみると、大野政治著『下総国 龍角寺・龍腹寺・龍尾寺三山縁起について』（以下『三山縁起』の復刻と『法華華験記』『今昔物語』『四条畷市龍尾寺縁起』『白井市薬王寺縁起』等が追加されていた。

『三山縁起』は昭和42年に200部しか発行されず現在は貴重なものとなっている。（私は偶然にもこの本を2冊所持する幸運を得ていた）

私は面識等一切ないが、衝動的に印西市にある五十嵐氏宅を訪れた。ご自宅の前には

表札の出していない黒塗りの堅固な長屋門。大声を上げて呼びかけたが、立派な長屋門に声は、はね返されるだけ。携帯電話で電話番号を調べ、電話をするとご在宅。来意を告げると、ご自宅に招かれてお話を伺うことができた。

この本は「一冊500円だが、これだけで足が出ている。販売すると手数料が200円もかかる。現在まだ残部がある」等。

また「大野政治さんとの約束やこれまで研究してきた龍神伝説の集大成のつもりで昨年出版した」とのこと。何の気負いもなく淡々と話す。そのほか龍神伝説について色々お話を伺いし、1時間ほどで辞去する。

思う、このように貴重な郷土資料を自費出版し、郷土研究を支えていることを。以上の私の拙い文を以って同書を市民の皆様へ推奨する次第です。

（石川 西崎 正夫）

私の好きな風景

8月8日、立秋は過ぎたとはいえ、まだまだ暑い日が続いています。日本の夏は蒸し暑いのが特徴ですね。

南の国からの旅行者も、この国の暑さは、かつて経験したことがないといっています。とはいえ日差しは確実に傾いてきています。

田んぼの稲は黄金色を増して刈り取りのときを、今か今かと待っています。

私は田んぼの風景が大好きです。

春、桜の花が咲くころ畦道が整備され、田んぼは耕されて一面に水が張られ、田植えを待っています。

やがて、早苗が植えられ、冬の田んぼから景色は一変します。電車の窓から見るこの風景はたまりません。そして苗は成長します。

梅雨が明けて、水を十分吸った苗は夏の日差しで、ぐん

ぐん成長します。苗から稲になる過程では風に吹かれてゆれる。その姿は、田んぼが波打っているように見えます。苗が稲に成長して穂が出て花が咲き実を結びます。

「実る程 こうべを垂れる稲穂かな」その姿は人生訓を想わせますね。

そして刈り取りです。今はコンバインでたちまち米に成りますが、刈り取った稲を「オダ」に掛けて干しました。

こんな風景を見て育ちました。田んぼの最後は刈り取った稲の切り株です。落ち穂をついばむ鳥たちが来ています。一年はあつという間です。

私の人生もあつという間に前期高齢者。

若さを保つため市民カレッジに通い、楽しい毎日を過ごしています。

（上志津 志津 憲司）

こんにやくと私

文京区に「こんにやく閻魔」(注)と言うのがあります。

カミさんから「こんにやく閻魔」と呼ばれるほどのこんにやく好きの私が、今から約30年前に文京区から佐倉に引っ越してきたとき、タイミングよく自宅近くに家庭菜園を借りられたので、「よっしゃ！芋から手作りでこんにやくを作ろう！」と思いい立ち、こんにやく栽培が始まりました。しかし、何の知識もなく、芋を植えておけば自然に大きくなると思っていたのが、大きな間違いでした。

もともとこんにやくは山間の半日陰の畑で育つというイメージだったので、日当りの良い津田農園では8月末から9月の声を聞くと、芋が大きくなる晩秋を待たずに、葉っぱが夏枯れをして茎が倒れてしまったり、掘上げた芋を家の中に取り込んで春まで

保存している間にカビが生えたりと、なかなか思うようにはいきません。

そこで、数年前から土の中で越冬させたり、こんにやく芋を木陰に植えたり、友人が農家から借りている山の畑に分散して植えたりと、あの手この手の工夫をしています。

いろいろな悩みながらも自分で育てた芋から作ったこんにやくは、そんじよそこらのこんにやくとは比べ物にならない食感とおいしさです(と思っています)。

そのおいしいこんにやくを食べた時に、また新しく栽培意欲がわいてくるんです。

こんにやくバンザイ！

(注)「浄土宗常光山 源覚寺」

(稲荷台 津田 博徳)



銀座のキューピット

私は佐倉から東京・中央区の会社まで通勤している。今日は、秋の青空が広がり、銀座の柳にも涼しい風が吹き抜けている。

今年の夏がまだ、暑かった頃のことです。私は晴海通りを有楽町から三越に向かって歩いていました。銀座西五番街通りの角にあるブロンズのキューピット像のところを通りかかった。その日のキューピットには、女兒用の可愛らしい麦わら帽子が被されていた。強い日差しの中、涼しげにそしてほほえましく思い、通り過ぎた。なぜかその日の夕方の帰宅時にはキューピットの頭には麦わら帽子はなかった。翌朝の通勤時、キューピットに差しかかったとき、前を歩いていた30代と思われる男性が、キューピットに近づいて、頭をなでて行った。

その男性の祈るような仕草

に、私はきつと男性の心の中は「私の意中の女性のハートに矢を射って下さい」とお願いしたように思えた。私も通り過ぎるときに「あの男性の思いをかなえてね」と念じた。それから麦わら帽子も、かの男性もお目にかかることはないが、今朝、真つ青な秋空の下、キューピットを見て、ふと恋の行方が気になった。

銀座から築地に向かう。最近では早朝から築地市場を目指して歩く外国人観光客の数が多くなった。特に東南アジアから来た人が目立つ。地図やGPS機能付き携帯等を持っていて、交差点や商店の写真撮ったりしている。時に道に迷っているような観光客には声をかけるが、ほぼ築地市場が行き先だ。世界一の魚市場だ。行きたくなくなるのだろう。私は歩きながら「外国人観光客が佐倉に行きたくなるものはなんだろう」と考える。

(藤治台 高塚 国義)

11月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鐺木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

地方の人口が減少し流出して地方が消えてしまい、大都市にだけ人が集まる将来の社会を「極点社会」といつているようですが、2050年時点でも誰も住まなくなる割合を地域別に示した図表『国土の長期展望』があります。

首都圏の8・5%が一番少ないケースですが、一番多い北海道は何と52・3%、ほぼ半分が無人の土地になると予

想されています。

佐倉市は都心から40^{km}圏内にある地の利を活かして戦後、主としてサラリーマンのベッドタウンとして急速に人口を増やしてきました。しかし、最近伸び悩み17万余で足踏みが続いています。

兎に角、日本全体では人口減少時代に入るわけですから少しでも減らさないために人を呼び込む政策が、重要課題の一つになってきました。

（金井 義彰）

あとがき

先日の歴史探索の折り、雷電の墓の周辺にかわいらしくひっそりと咲く秋海棠（シユウカイドウ）の花を見つけた。

秋海棠は、中国原産で江戸時代初期に渡来した帰化植物です。その名の如く秋を告げる花として昔から親しまれています。晩夏から秋にかけて2〜3^{cm}程度の淡紅色の花を咲かせる。ベゴニアの仲間では花弁はよく似ているが、小さ

く垂れて少し下向きに咲く姿がなぜか可憐で趣がある。松尾芭蕉も「秋海棠西瓜の色に咲きにけり」と詠んでいる。

実は、9月上旬、那須旅行の帰りに、秋海棠の群生地である栃木市の出流町「出流ふれあいの森」を訪れた。出流山の溪流沿いにたくさん秋海棠が群れ咲いていた。花は優しく、可憐で、とても綺麗だった。秋の到来を感じるひと時であった。

（鵜澤 和良）